

佳作

一命の命

大分県 大分東明高等学校二年 岩田 凜

「元氣な男の子だね。」

お腹の大きいお母さんが先生に褒められていた。この時、私は小学五年生頃だったと思う。

初めてエコーを通じて「赤ちゃん」というのを見た。私は自分の弟を見た瞬間、画面上でしか見ていないのにすごく美しいものを見ているようで一粒の涙が私の頬をつたった。この日から私は弟が誕生する日をいつかな、いつかな、と待ちわびていた。

妊娠中のお母さんは、妊娠も産休ギリギリまで仕事を頑張っていた。お腹にいる弟は、

「動き過ぎだよ！ちょっとは休ませてよー」
など、文句を言っているのではないだろうか、いや待てよ、赤ちゃんって考える事できるの？と、幼いながらに色々考えていたのを覚えている。

私には当時お母さんのお腹の中にいた弟の前にもう一人弟がいる。でも、その弟は私が四才か五才の頃に生まれたので、その頃私がどう思っていたかは覚えていない。

だが、今は違う。五年生だ。赤ちゃんという生き物に接点が無かった私は好奇心旺盛な性格に更に火が付き、おばあちゃんに赤ちゃんは何か考えているの？とか、どうやってご飯を食べているの？と、たくさん質問した。おばあちゃんは、

「私は赤ちゃんやないけん分からんわ！」
とか、

「赤ちゃんはお母さんと唯一つながっているへその緒を通じて栄養を取っているんよ。」

と、優しく教えてくれた。「そうなんだ、でもどうやってお母さんから赤ちゃんのへその緒に栄養が行き渡るのだろう？」と、複雑に考えたりもしていた。

そしてお母さんが産休に入った。毎日、朝から晩まで仕事をしていたお母さんが学校から帰ると家に居るのはとても幸せだった。

だがしかし、やはり妊娠しているからなのだろうか、お母さんが物事一つ一つに繊細になった。まだ子供な私はどう対処すれば良いか分からずそっとしておいた…。

そして、ついにお母さんが病院に入院する事になった。お母さんが家に居ないのはすごく寂しかったが、それよりも次、お母さんに会う時は弟にも会えるんだ！と、弟に会うのが楽しみで楽しみで仕方が無かった。

弟が生まれる予定日の日の事だった。おばあちゃんから、

「まだ、赤ちゃん生まれてこんっち。きっと、ママのお腹の中が居心地いいんやろうなあ。」

そう言われた私は、弟に会うまでの期間が長くなったのが我慢しきれず、毎日毎日「早く赤ちゃんが生まれてきますように」と、空に向かって願っていた。

そして、二日か三日程予定日より遅れて新しい一つの命が誕生した。残念ながらその病院には子供が入れず、おばあちゃんや友人、お兄ちゃんが一目先に見て来て、たくさん感想や情報をもたらっていた。その時はまだ通信機器を持っていなかった為、おばあちゃんやお兄ちゃんの電話を借りてお母さんと電話をしていたが、声を聞いたり赤ちゃんの事を聞くと、

「早く帰って来んの？」
と、毎日聞いていたものだ。

一週間後……。ついに弟と初対面。最初は、小さい！サルみたい！触れられない！と、私が緊張してしまっても部屋から見つめていた。弟につきっきりのお母さんはすぐく大変そうだったけれど、それ以上に幸せに満ちていた。

新しい命が誕生すると、自分の世界が大きく変わったように感じる。そして、病気を患っていたおばあちゃんは「この子に忘れられない為にたくさん生きたい！」と、生きる希望を持つ事ができた。今はもう居ないけれど、きっと弟の中でおばあちゃんは生き続けていると思う。

このように人に限らず全ての生き物は、誕生について大きく成長できるものなんだと思う。